

2018 年度 宮城学院高等学校卒業式式辞

宮城学院における中学校からの6年間、あるいは高校からの3年間の学びを修めて、この学び舎を巣立つ155名の卒業生の皆さん、おめでとう。また、この日まで手塩にかけて育てられたお嬢様が、この良き日を迎えられ、深い喜びの中で共にこの場にご臨席くださっている保護者の皆様、ご家族の皆様に心からのお祝いを申し上げます。

皆さんのなかには最終的な進路が決まらず期待と緊張のなかですごし、おめでとうと言われても未だピンとこない人もいることと思います。しかし、私は必ずや神様が、一人一人に最善の道を備えてくださることに信頼し、なお祈りうちに覚えてまいりたく存じます。

ところで宮城学院のスクール・モットーは「神を畏れ、隣人を愛する」ということですが、この「隣人を愛する」という言葉が、もともと主イエスご自身の「**隣人を自分のように愛しなさい**」という御言葉からとられていることは、皆さんもよく知っていると思います。このほかにも聖書のなかには人と人とが、愛の絆を大切にしつつ共に生きること、共に歩むことの重要性がいろいろなところで告げられています。旧約聖書の創世記2章には、ずばり「**人が独りでいるのはよくない**」とされていますし、詩編133編にも「**見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び**」と告げられています。もちろん新約聖書なかでも使徒パウロは「**喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい**」と告げ、「**同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください**」とも記しています。そしてなにより決定的とも言える御言葉が主イエスご自身によって告げられているのです。「**わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい**」と。

ですから、愛の絆を大切にしつつ、共に生きること、共に歩むことは、私たちにとって最も大切な人生の課題であるに違いないのです。

にもかかわらず、私は今日、この卒業式の日皆さんに告げたいことがあります。それはあたかも主イエスが、聖書で説いていることと矛盾するように聞こえるかもしれませんが、「独りでいることができる人になってほしい」ということです。それはどういうことでしょうか。

ちょっと想像してみてくださいののですが、もし皆さんがある学校の学生寮の寮監となり、入寮者を選抜しなければならぬ立場となったら、その入寮面接ではどんなことを尋ねるでしょうか。

多分、多くの方が「寮では共同生活を円滑に進めるために寮則が決められています。起床時刻、食事時間、門限、就寝時刻などをしっかりと守ることができますか」とか、「あなたは先輩や仲間と共に生活することを喜び、互いに協力し合って生活することができますか」とか、「寮ではトイレや玄関などの共用部分を交代で清掃することになっています。その当番となったときにしっかりとその役目を担うことができますか」ということではないでしょうか。どれも大切な問いかけであるに違いありません。

かつてわたしは青山学院大学の教員でした。まだ若かったこともあり男子寮の寮監を2年ほど任され、入寮面接にも立ち会ったことがありました。実はその時、他の教職員の方が決してしなかった質問をわたしは必ずすることにしていました。それは「あなたは独りでいることができますか」という質問です。共同生活の場としての寮ということであれば、他の寮生との協調性が一番問われるべきことではあると思いますが、私自身はそのことと共に寮でこそ「独りでいることができること」も、大切な課題だと経験的に確信していたからです。

実は、牧師になる志を与えられて東京神学大学の学部3年に学士編入した時、最初の1年間はキャンパスのなかにある寮で過ごしたのです。毎晩、気の合った連中が4-5名互いの部屋を訪ね合い、盛り上がりげれば2時間程度は喧々囂々、侃々諤々の議論を始めます。それはそれは楽しいものでした。しかし、そのうちに気づいたのです。その話し合いの場をいつまでも離れられないH君がいることを。

その傾向は期末試験が近づくとひどくなります。試験勉強をしている仲間の部屋にH君は次々と入り浸り、「お、やっているね。俺はまだ全然手がつかないよ。まいっちゃうなあ」とひとしきり嘆き、20-30分よもやま話をするのです。そのあと自分の部屋に戻るかと思うと、また別の人の部屋に行き、「え、来週提出のレポートをもう書き始めてるの。まだ課題図書も読んでないよ」と嘆きつつ話し始めます。そのようにH君は、今、誠実に課題に取り組んでいる仲間のところを次々に訪ねては勉強の邪魔をするという具合です。ひとりであることに耐えられないからです。自分の課題から逃げているからです。そ

して仲間と共に生きる生活を乱すのです。

皆さんは高校生活を振り返って、中間テスト、期末テストの勉強をしなければならないと思いつつもなかなか手につかない経験をしたことはないでしょうか。「やらなきゃ、やらなきゃ」と思いつつも、いざ机に向かおうとすると、「ああ、コーヒーを飲もう」、「トイレに行こう」、「やおら机の上の手鏡をとって眉毛の形を整えよう」とあれやこれやのことが思い浮かび、目の前の教科書や参考書を開いて、事実勉強に身を入れることができない。その最重要課題を回避してしまうのです。そんなときにお母さんからからチョコちゃんよろしく「なにぼけっとしているの。さっさと勉強しなさいよ」と言われようものなら、それだけでぷつんと切れて「ああ、最悪、今、やろうとしていたところなのに、そんなこと言うからやる気なくなるのよ」とこれ幸い、おかあさんに責任転嫁し、どたっとベッドにふて寝してしまったなんてことはなかったでしょうか。かくいうわたしも高校生の頃は、しばしばそんなことをしてきました。勉強するということ、それはお母さんの課題でもなければ、お父さんの課題でもありません。だれかほかの友達にやってもらわなければならないわけにもいかない自分の課題です。誰がって、なにより自分が、その課題にきちんと向き合い、担っていかなければならないのです。自分を甘やかし、課題から逃避してはなりません。そこで自立すること。そこで自分が立つこと、自分を律することが求められます。

ナチス・ヒトラーに対する抵抗運動に加わって逮捕され、絞首刑に処されたディートリッヒ・ボンヘッフアーという 20 世紀を代表するドイツの神学者がいました。彼は『共に生きる生活』という素晴らしい本を著しました。今でもカトリック、プロテスタントを問わず、世界中で多くの心あるキリスト者に読み継がれています。彼はそのなかで「**一人でいることのできない者は[交わりにはいること]を用心しなさい。交わりのなかにいない者は、ひとりでいることに用心しなさい**」と記しています。これは実に深い洞察です。もうすこし言い換えるなら、独りでいることができる者が、真実の意味で、共に生きる者となれるということです。

高校を卒業するということは、まさしく自立し成熟した大人となる門口に立ったということです。わたしが心から願うことは、皆さんに「独りでいる勇気と、共に生きる愛」を身に着けた人になってほしいということにほかなりません。

だからこそわたしから皆さんにお願いがあります。テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 5 章 18 節の「どんなことにも感謝しなさい」という御言葉を今日、実行してほしいのです。すこし勇気がいるかもしれませんが、空気のような存在でありつつ、しかもその人なくしては生きてはいけない大切な大切な存在なのですが、あまりに身近すぎて、なんとなく気恥ずかしいということも分かります。でも、独りでいることができる自立した人間の第一歩として、はっきり声に出して「お父さん、お母さん、卒業しました。宮城学院で学ぶ機会を与えてくださってありがとうございます。これからもよろしく」と。

最後にアイルランドの伝統的な祝福の祈りを、皆さんに贈りたいと思います。

あなたの前に歩むべき道が常に開かれるように。
風があなたの背中を優しく押すように。
太陽があなたの顔を暖かく照らすように。
雨があなたの田畑をしとしとと潤すように。
そしてまた会う日まで、
願わくは、慈しみの神が、あなたをしっかりとその御手の内に置き給い、
あなたに平安を賜るように。

ご卒業おめでとう。主が皆さんと共にいて、
人生の旅路を祝し、導いてくださいますように。

2019 年 3 月 1 日

宮城学院学院長
嶋田 順 好